

目 次

◆ 「小さなゆうわ座」について	進行 小田嶋 利江	p.2
(記録 小田嶋 利江)		
◆ 語りを聞く (一)		p.4
「古下駄のお化け」	語り 土見 壽郎	
「焼き供養」		
(記録 山田 裕子)		
◆ 土見壽郎さんと寒風沢島について	解説 山田 裕子	p.7
(記録 山田 裕子)		
◆ 語りを聞く (二)		p.11
「慶長津波で集落が元屋敷から移る」	語り 土見 壽郎	
(記録 倉林 恵子)		
◆ みなさんと感想や意見の交換		p.14
(記録 倉林 恵子)		
◆ 語りを聞く (三)		p.15
「天水が頼りの島の米づくり」	語り 土見 壽郎	
「干潮を待って田の水を排水する」		
「陰田島で賭けをした若え者」		
「海と暮らしてきた島で海が見えない」		
(記録 島津 信子)		
◆ みなさんと感想や意見の交換		p.23
(記録 加藤 恵子)		

小さなゆうわ座 各担当者等

〈当日〉	司会進行	小田嶋 利江
	解説	山田 裕子
	板書	佐竹 真紀子
	撮影・映写	福原 悠介
	smtスタッフ	北 友花・山本 玲央
〈記録〉	文字起し	小田嶋 利江・加藤 恵子・倉林 恵子・島津 信子・山田 裕子
〈協力〉	写真提供	塩釜市観光物産協会

小さなゆうわ座 一話に遊び 輪を結び 座に集う—
海とくらししてきた人たちの話 ー寒風沢島の「古げたのお化け」から考えるー

◆「小さなゆうわ座」について

進行 小田嶋 利江（みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチーム）

みなさん、こんにちは。寒い中をよく足を運んでいただきまして、こんなにみなさん集まっていたいで、とてもうれしく思っています。今日は、〈小さなゆうわ座〉という催しをわれわれは開きます。これは、いま解説してもらったとおり、〈みやぎ民話の会〉の有志と、それから〈せんだいメディアテーク〉が協働で行う催しです。

【〈みやぎ民話の会〉と〈民話 声の図書室〉】

簡単に〈みやぎ民話の会〉について説明しますと、五十年近く前ですか、一九七五年ころから宮城県内を中心にして、東北各地の山や海や里を訪ねて、その土地に生きる人達から民話を聞いて記録してきたサークルです。二〇一一年の大地震と大津波の後に、[地震と津波の体験を語るつどいを開き]、その記録活動をきっかけとして、せんだいメディアテークとの出会いの機会をいただきました。その後わたしたち二者が協働で映像、それから音声による民話記録を続けてきました。

その活動の全体を〈民話 声の図書室〉という名前をつけ、いろいろな活動を行っています。その活動の柱の一つが、民話の語り手の語りを、民話という一つ一つの話だけではなくて、聞いたり語り合ったりする語りの場をそのまま映像に記録するという DVD を制作しています。いままでさまざまな語り手の語りを映像に撮り、DVD として記録してきました。

正確にちょっとわからないのですが、この語りの DVD は、シリーズとして数十巻になっておりますので、メディアテーク二階の映像音響ライブラリーで、みなさん視聴したり借り出したりすることができます。興味のある方はご利用してみてください。

【くらしに根差した語り手の記録】

その語りの映像を撮り始めたころ、震災からすぐ後のころは、まだお一人で、きっちりとした輪郭のある、起承転結のある物語としての民話を、数十話から数百話までも語ることができる優れた語り手、伝承の語り手が何人かまだご存命でいらっしゃいました。そこで、まずその方たちの語りの映像を撮っておりました。ところが、震災後、年を経るに従って、そういう語り手の方たちが一人、二人とお亡くなりになっていきました。

ただ、だからといって、民話の語り手がすっかりいなくなれたのではなく、そんなふうにとくさんの話を語られるのではないんですけれども、それぞれの土地に生きてきて、それぞれの土地にはその土地に根ざした暮らしがあるように、その暮らしに根差した話を語られる、そういう語り手の方はいまもいらっしゃいます。そうした語り手から、暮らしの語りも含めて語りを聞く映像をいろいろ撮ってまいりました。今日はそういう映像を見ていただこうと思います。

【〈民話 ゆうわ座〉のあゆみ】

〈声の図書室〉の活動はいくつかありますが、もう一つの柱として〈民話 ゆうわ座〉という催しがあります。これは、民話の語り手を訪ねること、これを採訪と言いますが、その採訪の現場で訪ねた私たちと

語り手が聞き合い、語り合う中で、そのやりとりの中で問いかけられた問題を持ってきて、それを私たちが記録してきた音声や映像の話を見ていただきながら、みなさんと考えてみようという、そういう催しでした。

たとえばこれまで、「カチカチ山」「笠地藏」「食わず女房」などのよく知られた話を取り上げたり、また民話の中の「子のない年寄りたち」とか、民話の中の「子どもたち」とか、そういう民話の中によく登場してくる者たちを取り上げたりして、それを皆さんと考えてきました。

【〈小さなゆうわ座〉をひらく】

そうした民話についてのとても深くて大きな問いかけなんですけれども、その問いかけを受け継ぎつつも、最近語ってもらっている土地に根付いた小さな話たちにも、もっと目を向けて考えてみたいなと思いました。そこで、もっと身近な、手元足元の小さな話にも目を凝らして、土地の歴史や暮らしとともに生きてきた話たちを、みなさんと一緒に考えてみたいと願って、〈小さなゆうわ座〉という少しあらたまった名をつけて、つどいの座を開くことにしました。

昨年度の〈小さなゆうわ座〉第一回は、山と生きてきた曾根つき子さんのきつね話をみなさんと見たり聞いたりして、その不思議な世界をみんなで考えてみました。今回第二回は、島に生まれ、島で生きてきた土見壽郎さんという方の語りを見ていただいて、海とくらしてきた人たちの話がどんなふうに島のくらしとともにあったか、みなさんと考えたいと思っています。

【寒風沢島と土見壽郎さんと「古げたのお化け」】

土見さんは、松島湾に浮かぶたくさんの島々からなる浦戸諸島のうち、一番大きな寒風沢島の生まれです。その島々の眺め、これはごく一部ですけれども、ちょっと映していただきましたが、こんな素敵な風景の中に暮らしてきた方です。では、その土見さんとその島々、寒風沢島について、山田裕子さんに解説していただきます。



提供:塩竈市観光物産協会

記録 小田嶋 利江(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

◆ 語りを聞く（一） 『民話声の図書室 塩竈市浦戸寒風沢の土見壽郎の語り』の映像より

語り 土見 壽郎

聞き手 山田 裕子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

小田嶋—その前にですね、土見さんの代表的なお話の一つである「古下駄のお化け」という民話をひとまず聞いていただきますので、お願いします。

* * * * 以下映像上映 * * * *

古下駄のお化け

むがしあったんだと。

寒風沢の家々が今の場所じゃなくて、元屋敷^{もとやしき}という砂浜の近くにあったときの話なんだと。

ある晩、表の通りを

「鼻痛え^い、鼻痛え^い」

と唸って歩くものがいたんだと。その唸り声は、ひと晩だけじゃなくて、次の晩も、そしてまた次の晩もするもんだがら、たちまち評判になったんだと。

「あんだ、聞いたか。あの『鼻痛え^い、鼻痛え^い』の唸り声」

「おお、聞いた、聞いた」

「なんだべ、あの声。あれは人の声じゃねえな。化け物でねえが」

ということになって、人々はもうおっかないもんだがら、夕方になると、早々と雨戸を閉めて家^{うち}に引きこもってしまったんだと。

そこで、その村の若者たち五、六人が集まって、その「鼻痛え^い、鼻痛え^い」の唸り声の正体を見届けることになったんだと。

そして、ある晩、手に手に棒とか長あい竹竿とか持って、物陰さ隠れで、「鼻痛え^い、鼻痛え^い」の唸り声すんの待ってだんだと。

しばらくずっと、遠くのほうから聞こえてきたんだと、「鼻痛え^い、鼻痛え^い」の唸り声が。それがだんだんだんだん大きくこっちへ来るんだと。それで、近くまで来たときに、

「それえー」

ということで、一斉にその声のほうさ飛び掛かっていって、竹竿振りまわしたり棒振りまわしたりして、そこの「鼻痛え^い、鼻痛え^い」の正体をとっちめっぺどしたんだと。

ところが、なんの手がかりもなかったんだと。

〈あら、逃げらったか〉

と思ってたら、今度はそっちのほうで、

「鼻痛え^い、鼻痛え^い」

って唸り声がすんだと。

「それえ、そっち行っただあ」

つことで、またそこさ追っかけでいって、そして、長い竹竿とか棒を振り回してみだけんつも、そこでもなんにも手がかりねがったんだと。そうして、

「そっちだ」

「こっちだ」

ってひと晩じゅう振り回されて、もうくたくたに疲れて、そしてもう家さ帰って布団かぶって寝でしまったんだと。

そんなことがあって、何日かたったときに、そんなかのひとりの若^{わげ}え者が、のっぴきなんねえ用事あったもんだがら、夜出かけでいったんだと。

そして、要^{よう}の浜という近くさ来たれば、なにやらその藪^{わげ}んなかから賑やかなうたう声が聞こえて、そうして、なんかみんなで、踊りっこでも踊ってるような気配だったんだと。

〈ありゃ、今時分だれだべ〉

ど思^{おも}って、その若^{わげ}え者は、その藪^{わげ}のほうさ近づいていったんだと。

そしたら、こんな声が聞こえてきたんだと。

ふるがさ ふるみの ふるがっぱ
どんどん ばさばさ ばっさばさー

と言いながら、みんなして輪になって踊ってるふうだったんだと。

若^{わげ}え者はなおも近づいていったっけ、突然、

「おお、みんなやめろ。なんだか今夜気分が乗んねえ。それに変な気配する」

と言ったがと思うと、今までのあのざわめき、ぴたあと止まって、しーんとなったんだと。

そんで、その若^{わげ}え者はなんだがおっかねくなって、そして、ひと足、ふた足、そごんとご静か^{しずか}に離れて、あとは後ろも見ねえで一目散に逃げ帰って、そして寝でしまったんだと。

次の日になって、そのことを仲間の人たちに話したらば、

「んで、これからその場所さ行って確かめしてみっぺ」

っていうことになって、その若^{わげ}え者の案内で、その踊りの「どんどん ばさばさ ばっさばさ」の場所さ行ったんだと。そして、

「ここだ、ここだ」

って言って、若^{わげ}え者の指さすどこさ行って。その藪^{わげ}掻き分けでみたっけ、そのなかに、骨の折れた唐傘^{からかさ}だの、それから使い古された古簀^{わげ}だとか、それがら皮の取れた太鼓の胴だの、古合羽^{かっぱ}だのいっばいに集まっていたんだと。で、そのかたわらに、ひときわ大きな鼻緒の切れた下駄^{げた}が転がっていたんだと。

そこで、その若^{わげ}え人たちは察したんだと。

「ああ、さては、これらが化けで出たんだなあ。そうが、そうが。いらなくなったがらって、物つつのは粗末にするもんじゃねえなあ」

と口々に言いながら、それらを一カ所さ集めて、そして焼いで、きれいさっぱりと焼き供養づのしたんだと。

それがら、その「鼻痛^いえ、鼻痛^いえ」の唸り声も、「どんどん ばさばさ ばっさばさ」の変なうた声も、いっさいしねなくなったんだと。

「古下駄のお化け」のお話、これでえんつこもんつこ さげもした

* * * * 以上映像上映 * * * *

山田「焼き供養」について、お話しなさってるので、どうぞお聞きます。

* * * * 以下映像上映 * * * *

焼き供養

山田「焼き供養って…」

土見「焼き供養つのは、焼くというのは、ひとつは「きれいさっぱりにする」という意味と、それからもうひとつは、そのものを成仏させるというような意味もあるようにいわれて、それが行われているわけなんですけども、そうしたことで、その若^わ者たちも、きれいさっぱりと焼いたってということなんです。

山田「わたしはあまり聞いたことがないんですけど、焼き供養って寒風沢ではやるんですか。」

土見「焼き供養っていうのはあんまり使われないんですけども、やっぱり「古下駄のお化け」の民話には、そういうふう言い伝えられているんですね、焼き供養。で、供養というのは、ひとつはやっぱり焼いてきれいさっぱりとする、そしてそのものを、昇天、天に昇って「安らかに眠りなさいよ」と、そこに祈りをこめたひとつのやり方にもなっているようです。焼くということ、それは供養というような言葉は使わないんですけども、寒風沢では全てお葬式に使った道具なんかはそのまま埋めたり、一カ所さ放っておかないで、すっぱりともう焼ぐんですよ。跡形もなく灰にしてしまうんですね。灰にしてしまうことによって、そのものがちゃんともう、いわば少し難しい言葉でいうと、この世のなかの煩惱というものをすっかりなくして、きれいな心で天のほうで安らかな、永久、永久の眠りにつくというようなそんなような意味合いで、焼き供養と、供養という言葉も使うんじゃないかなというふうに思われています。

* * * * 以上映像上映 * * * *

小田嶋「はい、ありがとうございました。「古下駄のお化け」っていうのは、古ものがお化けになって出てくる。使われなくなって、邪険に捨てられて、ほっぽっておかれたのがお化けになって出てくるっていう、日本全国によく見られるお話なんですけど、ここでは元屋敷という寒風沢島の現実にあった地域、元の屋敷のあった地域にちなんだ語られていますね。で、「鼻痛^いえ」というなにか寂しそうな声でもありませんが、みんなではさばさと踊ってるという、なんか不思議な話だなあという気もしますが、このお話がその土地と結びついているということを知ってもらうために、語り手の土見さんについてと、あと浦戸諸島と寒風沢島についてを、山田裕子さんにちょっと説明していただきます。

記録 山田 裕子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

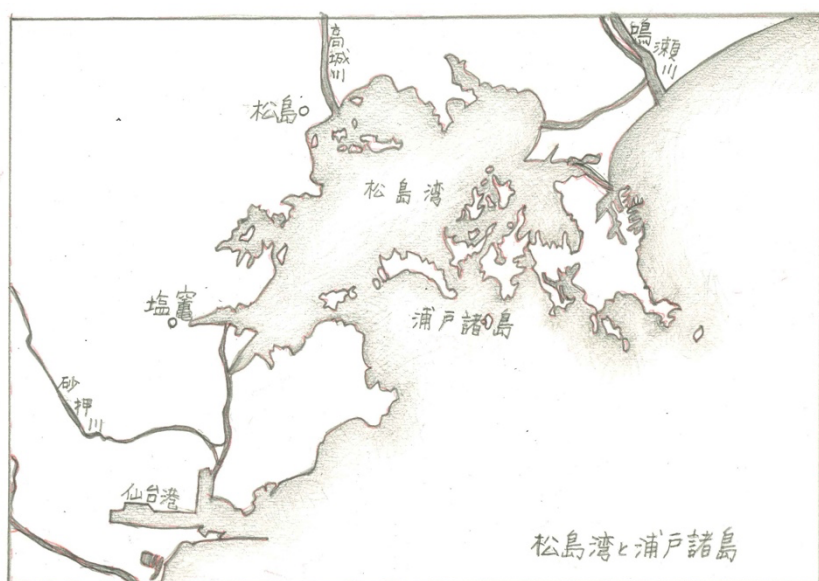
◆ 土見壽郎さんと寒風沢島について

解説 山田 裕子（みやぎ民話の会「民話声の図書室」プロジェクトチーム）

みなさん、こんにちは。今お話ししてくださった土見さんについてご紹介いたします。土見さんは大正十四年（一九三九）生まれですので、このとき、お話ししてくださったときには九十三歳なんですね。本当に驚きますよね。声にもすごく力がこもってらして。

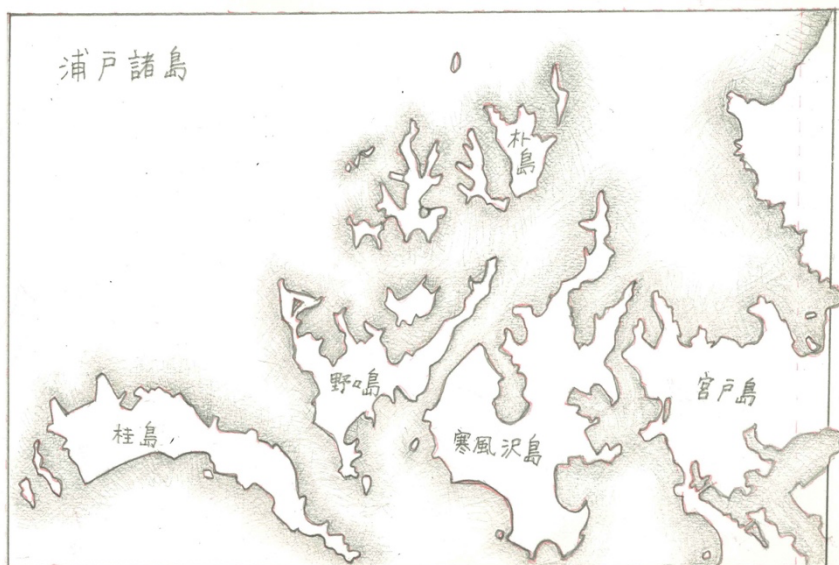
【浦戸諸島の寒風沢島と津波】

土見さんはですね、今小田嶋さんからもお話があったかと思うんですが、塩竈市に浦戸諸島っていうのがあるんですが、みなさんご存知でしょうか。松島の瑞巖寺のほうからは見えるけど、浦戸諸島には渡ったことがないっていう人が結構多いとは思いますが、（地図*を示しながら説明）松島湾のここの中にある



島々で、そこに松島が見えてますね、瑞巖寺がある辺りなんですけど。その浦戸諸島の一つが寒風沢島です。浦戸諸島は三百ぐらい大小の島々があるっていうんですけど、そのなかで人が住んでいる島は四つなんですね。桂島、野々島、寒風沢島、朴島で、この四つの島に人が住んでるんですが、一番大きな島が寒風沢島です。

浦戸諸島っていうその名前なんですけど、この松島湾のこちらの方が太平洋です。浦戸諸島は松島湾をちょうど塞ぐような形でありますよね。それがまるで松島湾の表戸のようだっていうので、それで浦戸諸島っていうんだそうです。震災のときにはこの浦戸諸島があったので、他の沿岸の町はおびただしい被害を受けたんですが、瑞巖寺とかその町並みが、この島々があったためにずいぶん被害が小さかったっていうふうなことです。けれども、戸の役目をした浦戸諸島はたいへんな被害がありました。ことに寒風沢島は、湾の一番外側に面していて、面積も大きいので、一番大きな被害を受けました。そのことは後でもお話ししたいと思います。



【土見壽郎さんのこと】

土見さんのことに話を戻しますと、土見さんはですね、この寒風沢島で生まれました。大正十四年生まれとお話ししましたが、おうちでは代々、島なんですけども米作りをして農業をして暮らしておられたお家でした。で、お父さんという方は、「東一」と書いて「とういち」さんとおっしゃるんですが、塩釜市で一番広い田んぼを耕してたそうです。島の中で一番大きい田んぼ、これ、ちょっとびっくりしますよね。私も最初は驚きました。それでその田んぼを耕すのに、もうとにかく朝晩お父さんとお母さんが働いたそうなんですけど、東一さんにあだ名がありまして、「夜中の東一つあん」って言われてたそうです。夜中までお父さんも働いてらしたんですね。お父さんとお母さんはとても働き者だったってことですが、そのお父さんとお母さんに、十一人兄弟の次男として生まれました。

土見さんは二番目でしたので、自分は跡は継がないと思ってたっておっしゃるんですが、五つ離れた長男の方が戦争にいて戦死したために、土見さんが尋常高等小学校を終えられて、十五歳のときに家業の農業に就かれたそうです。農業に就かれて、^{くわがしら}鋤頭（家内の農作業において指揮差配に当たる者）っていうのをなさったっていうんですね。鋤頭っていうのは、土を耕したりする鋤の頭って書いて鋤頭なんですね。もう十五歳になったときから、田んぼの仕事、それから人を頼まなくてはいけないのでその人手の采配を中心になって十五歳のときから始めたんだそうです。

【海の仕事と田の仕事】

そうやって農業を継いだのと同時に、島ですので、漁業も「片手間で」とご自身がおっしゃってたんですが、片手間っていつてもたいへんなことだと思うんですね。船を出して、その頃は木の船だったそうです、その船を漕ぎ出してワカメを取ったり、それからアサリですね、アサリ掻きしたり、そういう海の仕事も、田んぼの仕事の他に十五歳になったときから中心になってたそうです。田んぼの仕事も海の仕事もどちらもだったのととてもたいへんだったけど、特に田んぼの仕事は島独特なものがあって、それはもう口には言い尽くせないほどのものだったとおっしゃいます。なんといつても水が一番大事なんだけど、天水を、空から降ってくる雨を頼りにしたっていうんですね。後でまたみなさんに語りを聞いていただくんですけど、どれほどの苦勞だったかってことをお話しされていました。

【三度の津波】

それで、ちょっとこの映像にもう一回戻りますと、映像は島を離れてからですね、今回の大地震大津波で全部流されて、対岸の塩釜市の方に移られて、それから七年後にこの映像は撮っています。

話があちこちになってごめんなさい。土見さんのことをもう一つご紹介したいのは、三度津波に遭ったんだそうです、ご自身が。昭和八年（一九三三）の三陸津波のときは、ちょうど小学校二年生だったとおっしゃってました。そのときには家の内にも津波が入ったけど、でもそこまでの

大きな被害ではなかった、田んぼは大丈夫だった、「長靴でじゃぶじゃぶやって、畳すれすれまでは上がったけどね」とおっしゃってました。

それから二度目はチリ地震津波。チリ地震津波のときには、田んぼが大変な被害を受けたそうです。田んぼに穴があいたっていうふうなことをおっしゃってました。

それから三度目は今回の津波ですね。「今回の津波はもうなにもかも持っていった、隅から隅まで全部持ってった」っておっしゃってました。田んぼは、島を離れるまで、津波の後十日目に島を離れたんですが、そのとき八十五歳でしたが、田んぼを作ってたんだそうです。今回の津波は全て持っていったっていうふうにお話しされてました。それで、その後に、塩竈市内の方に移って暮らしておられました。

【民謡と民話を支えに】

あるとき、「土見さん、ここに来られてからの心の支えってなんですか」って聞いたら、「私はね、民話の会のみなさんと知り合って、民話に励まされていますよ」って。それから、「若いときから好きだった民謡があるから、それが心の支えになっています」とおっしゃってました。民謡のすごい名手っていうんですか、歌い手でらっしゃるから、声にもすごく張りがありました。

民話は、子供たちに七十歳過ぎてから語り始めたんだそうです。「小さいときにちょっと家の人とか近所の人に聞いていてうろ覚えだった。あるとき小学校の先生に、島にやってくる子供たちに民話を語ってくださって言われて、それで七十歳ぐらいから聞いたり調べたりして語り始めた」っておっしゃってました。そのなかでも「古下駄のお化け」は、これはよく覚えてるお話なんだそうです。

去年の秋にですね、長須賀さんと小田嶋さんと私と三人でお訪ねしました。九月の終わりでした。とてもしっかりしてらして、「またお会いしましょう」って言うとお別れしたんですが、十一月の終わりに亡くなりました。きっと、今ね、聞いていてくださってるんじゃないかなと思います。今日は、土見さんのお話を聞いていただきたいというふうに思います。

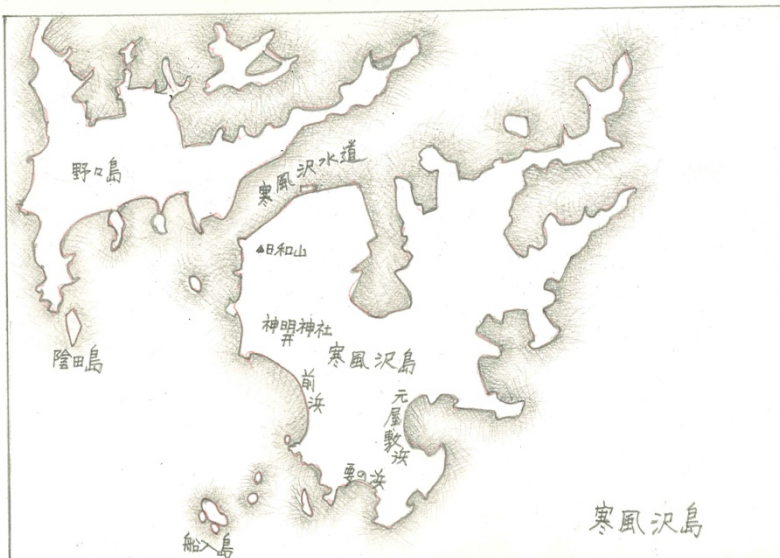
【慶長津波と元屋敷浜と焼き供養】

その前に寒風沢という土地について、簡単に説明します。地図*の二番目、三番目、見えますか。寒風沢島はこういうふうな形なんですね。それでさっきの「古下駄のお化け」の話に戻りますと、古下駄のお化け



が出てきたのは、^{よう}要の浜なんですね。元屋敷浜と要の浜は繋がってるんですが、ここでのお話なんです。

元屋敷浜っていう名前がなんでついてるかっていうと、土見さんのお話によると、慶長の津波のときまでは元屋敷浜の方に家があったんだそうです。そのように言い伝えられてるんだそうですね。ところが慶長の津波が来て、その反対側の（元屋敷にあった）集落がですね、こちらの寒風沢水道のところに移ったっていうんですね。元屋敷



敷浜は太平洋側ですので、そこからたくさん波が入ってきて、それで今話したように集落が移ったので、元屋敷っていう名前だっていうんです。で、先程の「古下駄のお化け」の話は、ここでいろんな古下駄とか古合羽とか、そういう古いものが、打ち捨てられたものが、歌ったり踊ったりしてるってお話なんですね。最後に「焼き供養」って出てきたんですが、焼いてそして供養するっていうところに、島の人たちの心がこもってるんじゃないかなっていうふうに思います。

【寒風沢島の歴史】

寒風沢島は、実はすごく江戸時代に栄えたところでした。塩釜の海（港の水深）が浅いために、塩竈の沿岸に船が着けなかったんですね。それで、寒風沢島の寒風沢水道っていうのが、真ん中に、野々島との間にありますよね、そこの寒風沢水道の寒風沢島側に日和山っていうのがあるんですが、そこのところに伊達藩の米と幕府の直轄地の米を積む千石船が、ここに着いたんだそうです。石巻に並ぶくらいの港だったって言うんですね。ですから、すごくここが賑わったんだそうです。その賑わったことがわかるものがあります。



写真（写真 日和山の方位石）は、日和山って、どこでも港にありますよね。そこの日和山に登って、風を見たり、それから方向を見たりして船を出すんですが、そこにある方位石*なんですね。方位石っていう、方角を見る石がちゃんときれいに残ってるんです。日本でも、こんなにきれいに残ってるのはなかなかないんだそうです。これは上から見ると、見えますか、十二支になって、方角がちゃんとわかるようになってるんですね。ですから、船で入ってきたらここに登って、そして方角見てたっていうことなんですね。

あともう一つ、この島がとても栄えてたってわかるものが日和山にあるんです。（写真 縛り地藏*）これ変わってますよね。縛り地藏っていう縛られてるんです。この辺には遊郭なんかもあって、船で出て行くときに、（遊郭などの）女の人達が「船が出て行きませんように。どうぞ嵐になりますように」という願をかけたんだそうです、こうやってぐるぐる縛って。その願いが叶えられると、この縄を解いたっていう地藏さまも残っております。



ここは船が先ほど話しましたように、福島県の二本松の方から、それから山形の米沢の方から阿武隈川を下ってここに米を集めて、伊達藩の米も集めて、江戸に運んだというところです。この寒風沢水道には、そういう千石船がずらっと並んだっていうお話です。

土見さんの紹介と島のお話をしてきましたけども、またおいおいお話したいと思います。

◆ 語りを聞く（二） 『民話声の図書室 塩竈市浦戸寒風沢の土見壽郎の語り』の映像より

語り 土見 壽郎

聞き手・解説 山田 裕子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

小田嶋—それではですね。次に「語りを聞く（二）」として、そのさっきお話に出て来た元屋敷浜っていう名前の裏にあるいろんな経緯について土見さんが語っている映像がありますので、それを見ていただきます。お願いします。

* * * * 以下映像上映 * * * *

慶長津波で集落が元屋敷から移る

山田—土見さん、元屋敷っておっしゃったでしょう？

土見—はい。

山田—元屋敷っていうのは、今のその、元々あったんですか？

土見—元々あったんです。地名として、それ、人家があって、それが慶長の津波で 集落が全滅に近い状態になったもんですから、人々はそこから今の寒風沢のある場所に移動したんです。で、元屋敷という所は入り江になっているわけですけども、前面に浜があって、その入り江になっているんですけども、ちょうど津波が押し寄せた場合に、ちょうど真正面、真正面からそこに入る、そういう向きのところなんですね。そのために津波があった場合には、被害を受けやすい場所なんで。で、今の寒風沢の家々^{うちうち}があるところは、前がこう水道になってるわけなんです。それで津波が来ても、大きな津波でなければそこをずっと通り越して通って行くわけです。川みたいに流れて行くんですよ。そして、松島湾の奥のほうに行ってしまうんです。で、昭和三十五年のチリ地震津波の時は、これもかなり大きな津波が来たんですけども、人家にはほとんど被害がなかったんです。しかし、元屋敷にはもう大きな被害を及ぼしたんですよ。

山田—チリ地震の時もですね。

土見—チリ地震津波の時は、田畑ももうすっかりえぐられて、そして、その当時はコンクリートの堤防じゃなくて、ただの普通の自然な砂浜だったんです。で、土手って言ってもたいした高さはなかったんです。平常は波静かなとこでしたから。ところが、そのチリ地震の津波でもって、その堤防はすっかりもう跡形もないようにえぐられて、それから、田んぼのほうにも大きな穴が開いたんです。そして、押し寄せた波は、ずっとその場所から元屋敷から遠い約何百メートルものところまで来て、そしてそこで止まったんです。その崖の下で。

山田—土見さん、こういうふうに松島湾がありますよね。湾がこうね、塩釜がここにあるとすれば、今、四つの島に人が住んでいますよね。野々島、桂島、それから朴島、寒風沢。

土見—石浜もあれば寒風沢もある。

山田—でも寒風沢のその今言った浜は、元屋敷のところがあつたっていう浜は太平洋に面してるので、四つの島の中でやっぱり津波が来た時には一番そこが、被害に…

土見—そこが津波の被害を受けやすいというような方向を向いてる浜なんですね。ちょうど南の方から津波が来ますから、太平洋の方から。

山田—元屋敷っていうふうに地名でも残ってるんですけど。その他にそういう何か痕跡ってかそこに居たっていうのがわかるようなことってありますか？例えば、田んぼは土見さんの今住んでいるところからちょっと離れていますよね。

土見—ええ、それでその元屋敷はちょうど浜際まで田んぼがあつたんですよ。で、その田んぼのあつた場所が、田んぼの、確か、現在の寒風沢の^{うち}家々が建っている家、隣の家には、私の後ろの^{うち}家には元屋敷にも田んぼが近くにそばにあるんですよ、田んぼが隣。そういうことで、その元屋敷に^{うち}家があつたのがそっくりそのまま寒風沢のほうの^{うち}家を建てる際に、区割りみたいな感じでそのままなつたんじゃないかなという感じもするんですけども、ただ、そのところは私ははっきりしないんですね。

山田—でもやっぱり元屋敷っていう、さっき地名がって言いましたけれど、田んぼも元屋敷に近いところにありますもんね。

土見—そうなんですね。

山田—今のお話だと、その田んぼの区割りと今の住んでいる所の屋敷の区割りは、お互いに隣同士だから…

土見—ほぼ同じ見たいな感じなんです。

山田—もう四百年、それが元屋敷から今のところに移ったのは四百年ぐらい前ですね。

土見—四百年ぐらい前なんです。慶長の大津波があつて、一九一二年でしたかね、慶長十一年か、あるいは十年かね、その頃だったと思うんですね（正確には慶長十六年（一六一一））。約四百年とちょっとぐらいですかね。

山田—だから、まさかこっちに移ってきて、その、今のところにね

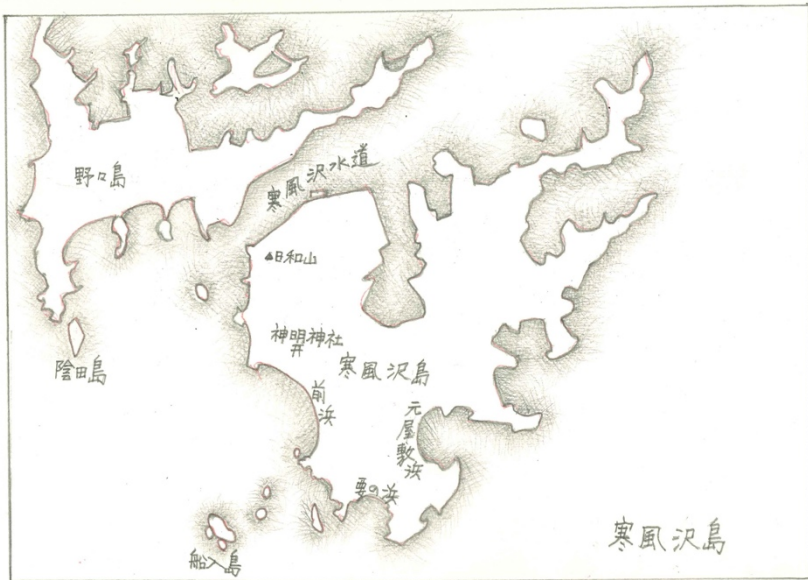
土見—あ、一九〇〇年でなくて一六〇〇年です。

山田—そうやって移って来て、土見さんがその時ね、お話した時に、こっちのほうにもう居るから、絶対にもう津波はここは来ないって、その時おっしゃってたんですよ。元屋敷からこうやってこういう安全なところに居たんだからって。

土見—それで、チリ地震の津波の時は津波が押し寄せましたけれども、流された^{うち}家っていうのはなかったんですね。ただ、床上すれすれに波は来ました。私の^{うち}家でも床上浸水すれすれのところまで来て、畳なんかも無駄に、塩水ですから干しても干してもだめですから。その程度の被害を受けましたけれども、^{うち}家のほうには何も壊されたとか、半壊とか、三分程度の被害だとか、そんなことは全然なくて、そして、あつた被害っていうのは田んぼなんですよ。この当時は、堤防が砂浜でしたから、壊されて田んぼもその津波の勢いでえぐられたんです。波がドオッと少しく何か障害物があつて、そこから降りますとね、ものすごい勢いで、いわゆるジェットで、水圧で何かその土を吹っ飛ばすというような感じだと思うんですが、津波の勢いでもって、そして土を吹き飛ばして、そして、こう上のほうまで遠くのほうまで津波が^{のぼ}上ってきたということで、田んぼはそのとおりなんですね。その堤防の近くの田んぼは大きくえぐられたような状態だったんですね。

【慶長地震津波と元屋敷】

何か私の説明が、飛んだりしてごめんなさい。要するに、元屋敷から土見さんたちは慶長の津波で、先ほど寒風沢水道っていう千石船^{せんごくふね}の着いたところがありますよね、そこの港の側に移ったんです。で、土見さんのお家^{うち}の集落は本当に海のすぐ近くで、海がすぐそこに見えるようなところに移ったんですね。で、今お話したみたいに、元屋敷の庭・家^{うち}も田んぼもあったのに、家^{うち}だけが寒風沢水道側に移って、もう大丈夫だと思ってたのに、今回の津波で家まで持って行かれてしまったっていうことなんですね。



それで先ほど地図でもその位置についてお話いただきました。わかりますよね。この地図*見ると位置関係が。元屋敷の方から寒風沢水道のほうに、寒風沢水道ってのは野々島と日和山^{ひよりやま}の間にある川みたいなところを、寒風沢水道っていうふうに言ってるんですけど。そっちのほうに移って、です、で、日和山^{ひよりやま}もそこにあります。で、慶長の津波で屋敷が、集落が移るほどの大きな被害を受けました。

【チリ地震津波】

それと一緒にチリ地震津波のこともお話なさってましたね。で、チリ地震津波の時には、家^{うち}の方はたいしたことなかったけど、田んぼは大変なことになったっていうふうにおっしゃってました。それで、チリ地震



津波の碑*がこの元屋敷のすぐそばのところに建っています。で、ここには何も家も一軒もないんですね。それで私たちが行った時も、誰も人が通ってなかったんですね。で、土見さんに「なぜここに建てたんですか？」と、お聞きしたことがありました。そしたら、島の人達も、どっちに建てようかってお話になったらしいんですよ。自分たちが今居るほうだとみんな見るんじゃないかと。でもやはりこの元屋敷側のほうから津波が来たんだから、この場所が大事だということで、今のところに津波の碑を建てています。チリ地震津波の碑ではあるけれども、その津波の大きさを慶長津波の、これまでの、また、その間にあった津波の大きさも物語っている碑じゃないのかなというふうに思います。

ここで語り伝えて来た、今最初に「古下駄のお化け」っていうお話を聞いていただきました。

【チリ地震津波後の水田復旧】

それですね、ちょっと一言つけ足しますと、堤防はあのチリ地震津波までは自然の堤防だったそうです。砂をちょっと高くして、そしてそこに木を植えたりした自然の堤防だったそうですが、チリ地震津波の時に田んぼが、土見さんのお話によると、全部田んぼをえぐって行って四メートル崖を^{のぼ}上ったんだそうです。チリ地震津波の時に。それで、これではだめだ。みんながもう諦めて、もう止めようかっていう時に、自分は島で一番田んぼを作ってるものだから、自分が頑張らなくてどうするっていうので、みんなに呼び掛けて堤防を造ったっていうことでした。呼びかけて堤防を造ろうっていうので、みんなで県の方に働きかけて、堤防を造ったというお話です。ですので、チリ地震津波後には堤防が出来ました。

小田嶋一はい、ありがとうございました。最初に聞いていただいた「古下駄のお化け」の話で出てくる元屋敷という土地は、実は慶長津波で家が全部流されてしまった土地だったんですね。で、その「古下駄のお化け」の話っていうのは、その元屋敷に集落があった頃っていうことですから、流されてから語られ続けてきた話なんだと思います。つまり、もう家々がなくなってすべてなくなってしまった元の^{いえいえ}家々のあったころの話として、「古下駄のお化け」という古ものが捨てられてしまって、そのまま放っておかれてそれが化けてくるという、そういうお話を伝えている。なんだか深い意味がありそうな気がするんですけども…

記録 倉林 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

◆ みなさんと感想や意見の交換

小田嶋—ここまでで皆さんに何かご感想なり何かありましたら、ちょっと出していただきたいと思うんですが。あと質問でもいいんですが、ありますでしょうか？

A—はい。さっきのね、かけ声、あれ何て言ってんですか？ 「腹痛い」って言ってんですか？

小田嶋—鼻痛い。鼻

A—歯？

小田嶋—鼻、鼻、鼻

A—腹じゃないの？

小田嶋—腹じゃないんです。古下駄なんで。鼻緒があって、その鼻緒が切れてしまってたんですよ。

A—腹痛でえ、腹痛でえ、って聞こえたもので。おなかではないのね。

小田嶋—ええ、鼻。だからその大きな下駄が壊れて捨てられて、その鼻が切れてしまっているっていう、そのさまを叫んでいるっていう、そういうお話なんですね。あと、ありますか？ はい。

B—すいません、ちょっと不思議に思ったんですけれども、三度も大きな津波、慶長も含めると四度になるんですよ。その間にもあったかもしれません。で、そういうところに言い伝えられてきた物語が、民話が津波そのものに関わることだったら、それは伝承しなければいけないという気持ちで働いて伝わって来ただろうと思うのに、なぜ古下駄のお化けなんだろうというあたりが、ちょっと私には謎でしたっていう感想でしかないんですけど。小田嶋さんあたりは何かお考えになったことありましたか？

小田嶋—そうですね。津波そのものの伝承というのも、事実の伝承としては伝えられてはいますよね。慶長の津波で元屋敷浜の部落はみんな流されてしまったとか、チリ地震津波の時はどうだったとか、さらにさかのぼって、寒風沢の一番北のところの鰐^{わに}ゲ^{がふち}淵^{ふち}っていう所があるんですけど、宮戸島との間の、実はその前は元屋敷のもっと前はそっちに集落があって、そこも津波で流されて移動したっていうような伝承もあるみたいなんですね。だから、確かに津波は何回となく襲って来るっていうのは確かで、それがどんどんどんどん積み重なって記憶されていくんですけど、でもそういう事実の記憶だけではなくて、なにかその捨てられたものの叫びとか、それから踊り狂ってる姿とか、それからそれを焼いてきれいにしてあげて、なんて言うんでしょうね、そのものを成仏させるというのかな、そうしてあげたっていうお話とかも伝わっているっていうのはとても不思議なことのような気が私もします。

記録 倉林 恵子(みやぎ民話の会、「民話 声の図書室」プロジェクトチーム)

◆ 語りを聞く (三) 『民話声の図書室 塩竈市浦戸寒風沢の土見壽郎の語り』の映像より

語り 土見 寿郎

聞き手・解説 山田 裕子（みやぎ民話の会「民話 声の図書室」プロジェクトチーム）

小田嶋—じゃあ、まだ続きますので。これからまた語りを聞いていただきますので、次にいきたいと思
います。じゃあ、次にちょっとまた違ったお話を聞いていただきます。今度はすごく近い時代のお話で、本
当にあったというか、いわゆる世間話と呼ばれるお話です。ちょっとおもしろいお話ですので、願いま
す。

* * * * 以下映像上映 * * * *

陰田島で賭けをした^{ねけ}若え者

山田—わたし、いつもね、好きな島があって、必ず帰るとき^{かげたしま}陰田島を通りますね。

土見—はい、あります

山田—あの島は、前に「花魁島」^{おいらんじま}とも呼ばれていたといいますけど、陰田島という名前も、
別名花魁島という名前もね、どちらも面白い名前だなあと思うんですけど、これに関わ
るお話ってありますか。

土見—ええ。それで、花魁島というのは、地図に載っている本当の地名ではないんですね。
で、なぜ花魁島という呼び方がそこにも出てきたかといいますとね、ちょうど陰田島の
てっぺんのほうに松の木があるわけですよ。その木の形が、ちょうど花魁が頭のてっ
ぺんに^{かんざし}簪さしますね。三本とか四本どがさして、そういう形で似ているために、花魁
島って名前が誰がつけたかわからないということですね、そういう呼び方をするようにな
ったんです。ですけれども、地図に正式な地名としては、「陰田島」なんですよ。で、そ
の陰田島にもふたつあるんですよ。ひとつは、日陰の「陰」、その陰の陰田島。それか
ら、物を賭ける、物事を賭けする、その「賭けた島」というふたつの名前があるんです
けれども、「陰田島」に「賭けた島」。それは、こんなような話が名前の由来として、民
話のなかに伝わってきているんですがね。それはこういうことなんですよ。

寒風沢の海岸、昔は「海岸前」^{かしまえ}っていったんです。その海岸前というのは、むかしはよく
若者たちが海の様子、潮時のかげんとか、大きい波あるから、今日は仕事できるかできない
か、海の様子を見に来るのが海岸なんです。当時の呼び方でいえば、^{かしまえ}海岸前なんです。

その若者たちが何人か集まると、そこにおしゃべりの輪ができるわけですよ。いろんな
話、仕事の話から、そうでないどこそこの^{わけ}若え者が今度嫁ごとするようになったどが、どこそ
れで金儲けだどがなんとか、いろんな話が出て、おしゃべりの楽しい時間過ごすんだったん
だど。それを^{かしまえ}海岸前でやるもんだがら、^{かしまえかいぎ}海岸前会議という名前がついたんだど。で、若い人
だどが何人か集まっておしゃべりしてんの、島の人が協通ると、「おお、おお、^{わけ ひ}若え人たち、
また^{かしまえかいぎ}海岸前会議やってんな」っていいながら、そば通ったりもするんだったど。

あるとぎ、その^{かしまえかいぎ}海岸前会議やってつとぎに、ある人がこんなこと言い出したんだど。

「おれな、あそこの陰田島さ…」

その当時陰田島という名前だったかどうかは、わたしもわからないんですけども、今陰田島って呼ばれている島、海岸前会議^{かしめえかいぎ}のなかで、ある若^{わけ}え者が、

「なあ、あそこの島通ったらば、てっぺんに松の木あっぺ。あの松の木さな、ミサゴ巣つくったんだ。そして、昨日あそご、おれ通ったれば、なんだがピヨピヨピヨピヨって、ヒナっこかえたようなんだなや。誰かあのヒナっこ、捕ってくる者いねがなあ」

つったんだど。

で、その若い者は、その陰田島っていうのは、まるで屏風たてたように、もう崖で、いまだかつてあそごに上ったっていう人はいながったんだど。誰も上らんねえってこと分かって、心のなかにあるもんだがら、こういう大きなこどまで言い出したんだど。

「あのな、あの島さ上ってヒナっこ捕ってきたらば、おれ、田あ一枚やるんだけっどもな」って言ったんだど。

そしたれば、そのなかにいた若^{わけ}え者が、

「田あ呉^けんのが」

って言ったんだど。

「田あ呉^けんならば、おれ捕ってくる」

と言ったんだど。

「おお、やるやる」

って言ったもんだがら、

「ああ、で、賭けたど。賭けしたど」

って、そのなかに上るって言った若^{わけ}え者が、

「必ず捕ってきたらば、田一枚おれさ呉^けろよ。賭けたど」

って言ったんだど。

そんで、その若い者は鍋かぶって、荒縄を腰さ下げで、そしてその島さ行ったんだど。

そうして、どっからどう上ったらいいがということ、いろいろいろいろ、そっちだこっちだで見で歩いて、

「ようし、あそごだらいいかしんね」

つうなわけで、なんとかかんとかその田んぼ欲しさに、一寸また一寸というようにして、手かけ足かけして上っていったんだど。そうして、頂上まで上ったんだど。

「ようし、今度はこの松の木だ。あの松の木上んなげね」

って、持っていった荒縄、枝さ引っ掛けで、なんとかかんとかそのヒナっこのピヨピヨピヨピヨ鳴いでとこまで、もう少しで手え届くところまで上ってったんだど。

そうしたれば、突然、ゴーツと羽の音したと思ったらば、親鳥が襲いかがってきたんだど。

そんで、その若^{わけ}え者、若^{わけ}え者は庄助っていうんだげんとも、その庄助はびっくりして、

「こんではヒナっこ捕るとこの騒ぎでねえ。もう田んぼどごろでねえ」

つうわけで、これはもしかしたら、命なくすかもわがんねえというこどで、そして下りっぺとしたんだどわ、もうあきらめて。

ほだけんども、そんときも手足が震えで、どうにも体、動がねぐなってたんだど。

それで、もうなんとかして下りなげねえと思って、願かけだんだど。

「神さまあ、おれどご助けでけらいーん。おれどご下ろしてけさいーん。おれどご下ろして

けだらば、おれ一生餅食^かねがら。どうぞ下ろしてけさいーん」
って、もう、それこそ必死^{めえ}なって神様さお願いしたんだ。

そうして、なんとかかんとか、こいつもまた、一寸下り二寸下りして、下まで下りてくる
ごどできだんだ。

で、その庄助があるとき、庄助の家訪^{うち}ねた者が、庄助餅食^かってるもんだがら、願かけで、
一生餅食^かねえがらって、そのために神さまに助けてもらったんだっていうようなこと知って
るもんだがら、その訪^{めえ}ねていった人が、

「なんだい、庄助、お前一生餅食^かねがらって、願かけて命助^{めえ}かったんでねえのが。なんだ、
そいづ食^{めえ}ってるんでねえのが」

つたれば、庄助けろっとして、

「おれ願かけだのは、一升餅食^{めえ}ねって願かけだんだ。今食^{めえ}ってんのは二升餅だ」(笑)
って、けろっとして言ったんだ。

これでえんつこもんつこさげした

土見—だから、「一生餅食^かねがら」つつたの、「一升餅食^かねがら」って、庄助、上手くすり抜
けたんだっちゅうことなんです。

山田—とっても頓智^{めえ}のきいた人ですね、頭のいい人ですね。

土見—うん、そういうごどになりますかね。だから賭けをしたために、「賭けだ島」とこうい
う名前がついたんだと、後がら。というようなごども言われでますし、あとは別名、
むかしはそごととごに田んぼがあったというごども…

山田—ええー

土見—あんな島のでっぺんにね。田んぼがあるわけないんだけど、何が松島湾がずっと
陸だったときに。あるいは田んぼあったんですかねえ。

山田—だって、こんな岩ですよ。

土見—岩なんですよ。

山田—通るたんびに、「やあ、ここ上ったんだ」と思って、必ず土見さんから聞いた話思い出
しますよ。

土見—だから、地名というのは、いろいろひょっとしたねえ、そごに言われかたしだのが地
名だったりするもんだがら、むがしの地形がそこも田んぼだったんだかどうかわかりま
せんけれども。

* * * * 以上映像上映 * * * *

山田—こんなお話も伝わってるんですよ。陰田島ってみなさんご存じの方いますかね。寒風沢水道に入
るときに、目印となる島、あと船なんかも入るときに、必ずそこを目指して入ってくるんですね。陰田島、
こういう島ですよ。ここに上る、賭けをしたっていうんですけれど。でもその賭けたものが、田んぼだってい
うところが、やっぱりとても田んぼっていうのが大事なものっていうことがわかるお話ですよ。実際に田
んぼをつくるために、本当にちょっとでも平らなところがあったら、作ったんだっていうんですね。今日、



浦戸諸島の方も来ているので、後でお話していただくといいかなと思うんですけども。海の、道路がなくて、舟でなければ行かないような砂浜に石垣を組んで田んぼを作った跡が今も残っています。田んぼって、すっごく島の人たちには大事なものでしたんですね。

実際に、土見さんも奥さんと一緒に田んぼに舟で、他にも本屋敷のところに田んぼがあった他にも、そういう舟でなければ、行けないところに田んぼがあったので、そこに通いながら田の仕事したっていうこともお話し

しました。

ちょっと、これはまた、ちょっと違うんですが、陰田島っていうのは、島の人たちにとっても大事な島だったっていうんですね。この辺りでは魚もよく捕れたっていうことなんですけど、ここでよく若い人達が、舟競走っていうのをしたんだそうです。戦後なんかも島の寒風沢の土見さんたちも、舟漕いで、今でいうとボートレースみたいに舟でその島をぐるっと廻って戻ってきて、一等とれば、何かもらえるっていうような、そういう舟競走したんだそうです。

そうしたら土見さんが、戦後まもなく、一等になったんだそうです。そうしたら、他の人たちに、「おめえ、やっぱり島で一番米食ってるからな」って言われたって言います。なんか、こういうおもしろい本当にあった話だと思うんですが、こういうお話も伝わっています。(笑)

それで、先ほどもお話しましたが、その大事に作ってきた田んぼなんですけど、島での米作りっていうのが、本当に苦労があったっていうことを先ほどお話をしましたが、特に水は大変だった、上から降ってくる水を頼りに米を作るのはどれほどの苦労だったかっていうのをお話していますので、聞いてください。

* * * * 以下映像上映 * * * *

天水が頼りの米作り

土見一わたしは農業が主で、それから漁業のほうに従でしたから。農業が田んぼなんですよ、稲づくりなんです。ところが、条件が悪いんですよ。天水。稲づくりで一番だいじなのは、水ですよ。水管理。それが一番だいじなんです。それが思うように教科書のようにできないんですよ。ですから、春になって苗を育てるのは、最初は水苗代といいましてね、田んぼに苗を育てる場所をつくって、そこに種をまいて、そして苗を育てていたんですけども、だんだんに苗づくりのほうがね、変わってきましたね、そして、わたしが七十五歳くらいのときからですね、ハウスで苗をつくるようになったんです。ですから、苗づくりはいいんですよ。これは、水は水道の水を使いますしね。ところが、田んぼに植えるとなりますとね。これは、天から降ってくるいわゆる天水、その水によって植えるわけですから、それが春先になりましてね、ちょうど干魃の年、雨の少ない年なんかはね、これは田植えができないんですよ。それで、もう時期が近づきますとね、天を仰いではね、「雨降んないがなあ」てなことで、もう寝ても覚めても雨降るの

を待っていると、そういうような状態でしたからね、そっちのほうでたいへん苦労しましたねえ。もう寝ても覚めてもという感じで、雨の少ない年は、天から雨の降るのを待ってたということでしたね。

山田—やっぱり雨が一番、水が…

土見—そうです。まず水で苦労しましたね。で、田植えの時期には雨がないと植えられませんか、それで雨の降るのを待つと。

干潮を待って田の水を排水する

土見—ところが、多すぎても困るんですよ、これまた。そうして、大雨降ったときなんかは、もう田んぼが冠水することがたびたびあったんですけども。その排水が、これまた自然排水なんですよ。海にゲートを開けて、水路からの水を海に流すわけですけども、いつでも流れるというようなことではないんです。干潮を見はからって、何時から何時までの間が、水位がちょうど田んぼの水が落ちるというその時間帯を見はからって落とすわけですから、で、それがなかなか排水が上手くいかないときもあるんです。そういうことで、水で苦労しましたねえ。だから、今こちらに来て、寝ててもその当時の苦労したことが心のなかに引っ掛かっているんですものね。夢に出てくるんですよ。もう田植えしなくちゃない、ところが、水がないとかですね。水で田んぼの植えた稲が水浸しになってしまったと。あそこ排水しなくちゃないというんだけれども、それが思うようにいかないというようなことが、もう夢のなかに出てきて、そして、目が覚めてから、「ああ、夢でよかった」って、というようなことなんですね、ええ。

山田—その天水。空から降ってくる雨を待ってるって、おっしゃってたけども、排水でも苦労なさったんですね。

土見—そうです。

山田—満潮、干潮っていうのは、今初めて知りました。普通はすぐに海だったら、ぱあっと排水できるのかなと思ったら、干潮のときじゃないと…

土見—ええ、干潮のときしか。ちょうど田んぼの水の位置と高さです、海の水の高さが同じでは落ちないんですよ。入ってもこなければ落ちてもいかないと。それより、海の水のほうが低くないと、水が出ていかないというようなことなんで、その時間を見はからって、ゲート、水門を開けて、落として、そしてまた落ちると水位が下がりますね、田んぼの方が。ですから、下がった水よりも海の水の方が高くななんいうちに、閉めなくちゃなんないんです。ですからたいへんな苦労でした。

山田—土見さんの今お話聞いていて、田んぼが目には浮かびます。ここらへんにはない風景ですものね。田んぼがあって、すぐ隣に、あれは湾ですかね、松島湾の海が見える。田んぼの隣に海が見えるっていうのは

土見—そうですよ。

山田—あれはほんとに心に残る風景ですよ。

土見—そうなんです。そうなんです。

山田—津波の時も、田んぼに水が…

土見—津波のときは、もうなんです。両方と言いますかね。四方から海の水が寒風沢の島に

襲いかかってきたんですよ。で、人家のある方からも入ってきたんです。昭和三十五年（一九六〇）のチリ地震津波の時は、ちょうど、一方の方からはいつてきたんです。田んぼのちょうど津波の押し寄せてきた、その方向から入ってきた。その方向には人家がなかったんです。で、その堤防は、その自然の砂浜だったんです、三十五年のチリ地震のときは。それが今度の津波では、その三十五年の津波の入った方向からも入る、それから、別な方の前浜^{まえばま}ってという砂浜もあるんですけど。

* * * * 以上映像上映 * * * *

山田一あの本当に美しい景色なんですよ。ないですよ、田んぼがずうっと広がってて、向こうに海が見えるんですよ。海と本当に近いところに、砂浜だったところに田んぼを作っていた。そののどかな風景に、実は雨、水にすごくご苦労されたっていうお話が。さっき、私初めて聞きましたって言いまして、天水だけかと思ったら、海にね、ちょっと浅い知恵だとすぐにパッと出せるかと思うんですけど、干潮を待って出さなくちゃいけないっていうお話なっていました。これがその田んぼなんです。寒風沢の田んぼ、すごくきれいですよね。これは、七年ぐらい前になりますか、この田んぼは。震災後もこうやって作っているところがありました。その頃は。

ここで、心に残るのは、夢に見るってところですよ。今も夢に見て、はっと目が覚めると、「ああ、作なくてよかったんだ」って。「ホッとする」っておっしゃって。でも、もし、別なそのもと前はね、「もしこうなっていなかったら、今ごろもきっと、子どもたちに食べさせるぐらいの米は作ってたと思うね」ってはおっしゃっていました。十五歳から七十年間、八十五歳まで作ってこられました。

それで、今見た田んぼも、私たちも先日寒風沢に行ってみましたけども、この風景もずいぶん変わっていました。今はもうほとんど、ごく一部の方だけで、天水を頼りに作ってこられることが、どれだけ大変なことかっていうので、今はもうほとんど、一部の方を除いて作っておられないということでした。

それでは最後に、震災後の海の寒風沢の暮らしについて、土見さんがお話していますので、これが最後の映像になります。どうぞご覧ください。

* * * * 以下映像上映 * * * *

海と暮らしてきた島で海が見えない

土見一島もあのとおり、津波の脅威から人命を守ることが、まずなににも増して優先するという考え方から城壁みたいな堤防が出来ましてね。それがあそこに住んでいる人は、見たくとも海が見えない。そうすると、その城壁の小さな門から堤防を出て海を眺めなければ海が見えない、というようなことになりましたしね。なにからなにまで変わってきましたね。

山田一土見さんところからね、ちょっとだけ出るともう前は海でしたものね。

土見一海を見てね

山田—そうそう

土見—生活してきたんですよ。そして、民話にもありましたように、海のそばの海岸っていうのは若者たちの社交の場でもあったんですね。みんなそこに暇さえあれば集まってくるね、わいわいがやがや、いろんなことをしゃべっては、仕事の話やら、あるいは、たわいのない、「あそこの島のでっぺんに、ミサゴ巣うくってヒナっこかえったがら、誰かあのヒナっこ、捕ってきてけねえが。とってきてけたらば、田あ一枚やる」っていうような話も民話で残ってますしね。ということで、海と島での生活というものは、日常もう切っても切れないような関係にあったんですけれども、今の城壁がねえ、わたしはあれもね、島の人たちにとってはね、ほんとに心のなか、自然から人の心を引き離す施設だなと、わたし、「なんでこんな、堤防ね、こんなのいらいないのに」とわたし思ってますけどね、ええ。

山田—すみません。ここでちょっと休憩しますね。

土見さんのところからも海が見えて、またすごくよかったのに、今はもう堤防しかないのですものね。

土見—そうなんですよ。そしてね、何回も津波に襲われてはね、その津波から立ち直って、海と関わりをもって生活をしてきたのが島なんですよ。で、津波があったからと言って、津波を決してね、海をおそれてはいなんです。海からいろんな生活のそういう糧というか手段をね、海から得て、そして海とともに生活してきたんですから。それが、あのような城壁でもって寒風沢に住んでいる人の目から海を見えなくしてしまったというようなことはね、わたしは、その当時、津波の当時からね、これは今までよりもし高くするとしてもそんなに高いのはいらないと、津波が来るとわかったら逃げればいいんだと。で、海に出てますよね、人がね。養殖の海苔でもカキでも海に養殖施設をつくっていますから、あるいは釣りにしてもあるいは網を刺すにしても、海に出ます。海に出るのが、津波がこわいからといって出ないわけにいかないんですよ。ですから、津波が来るということは、情報が、いろんな情報で耳に入りますから、だからそのときは逃げればいいんです。海にいた人は急いで帰ってきて、高いところへ逃げればいいんだ。そして、海とともに常に生活しているというそのままの形態を、そういう形から遮断するんじゃなくて、そのままの状態でなく常に目で海が見えるような、そういう環境で寒風沢というものがなくちゃならない、あったほうが、わたしは、あったほうがいいんじゃないか、あるべきだというふうに思っていますね。

山田—わたしも海のほうの生まれだから、すごくわかるころがあるかなと思うんですけど、海を見るとほんとうに気持ちが清々しまうもんね。

土見—海はね、わたしもね、今は山のほうに興味もっていますけどもね。海に出て、海苔もむかしは手摘みでしたからね、やり始めはね、機械がないときから始まりましたから。そのとき摘みながら、静かなときなんかはあたり見まわすわけですよ。そうするとね、景色がいいんです。「いいなあ」と思ったこともありますしね。それから朝に早あく、わたしね、浜に出て唄うんですよ。そうしますと、福島が見えんのね。

山田—福島が見えるんですか、ええ。

土見—お天気のいい日なんかは。福島だね、相馬。船がね、ずうっと、大きな船、貨物船、それが通ってくるとね、遠くのほう通るわけです。それがね、相馬港がかすかに見える

わけです。そこへ入ってくのも見えんですよ。だからそれなんか見えますとね、気持ちが癒やされました。ですからね、やはり海というものが、島に住んでいる人たちにどれだけ心を癒やしたりね、そして「よし、やろう」というような気持ちをね、奮い起こしたかわかりませんね。それ、あんな城壁ね、あれ、なんでしょ。

* * * * 以上映像上映 * * * *

山田一城壁って、土見さんおっしゃってましたけど、写真を見ていただくと、以前の堤防はこれなんです



ね。こっちからも海が見えますよね。堤防を新しくする前の寒風沢水道です。前のところが。それが、今回の津波の後に出来た堤防なんです。四、三メートルあります。それで、もう一枚の写真がこれは昔やってた自然の堤防ですね。

土見さんの島に対する思いを聞いていただきましたけど、今、土見さんは島を離れられましたけど、先日、今、島に住んでいらっしゃる津島さんという方に、区長さんをなさっていらっしゃるんですけど、失礼しました島津さんっていう、八十五歳になられるんですけど、区長さんしていらっしゃる方にお話を聞いてきたんですね。島津さんは、ちょうど土見さんの一軒置いて、隣のお家なんだそうです。その隣のお家で、田んぼの並びにやっぱりそうなんだっておっしゃってました。だから、移るときにさっきおっしゃってましたけど、田んぼの並びと一緒にというのは、ああ、やっぱりそうなんだって、聞きました。島津さんに、堤防のお話を聞いたら、「いやあ、自分たちもそれは反対したんだ」と。「だけど、四つの島の内、寒風沢だけが犠牲になった方が三人出たので、そんなことよりもとにかく人の命が大事だっていわれたときに、泣く泣くみんなで了解しました」って島津さんはおっしゃってました。





最後に、土見さんのこととお話すると、土見さんの島に対する思いをお話ししたんですけど、お渡しした資料のなかにですね、土見さんのちょうど、今日、詠んだ短歌に土見さんの思いが込められていますよね。そのころから、85歳から始めたんだそうです。短歌を。その短歌を地元にさかんに投稿されています。この三つ紹介しました。ひとつだけ、詠みたいと思います。

思い出す　くらしを支えし　米作り
汗をふきふき　田の草とりを

という歌を詠んでらっしゃいます。

今日は「古下駄のおばけ」を入りに、二つの寒風沢に伝わる民話を、みなさんに土見さんの語りで聞いていただきました。私も、最初聞いたときには、この古下駄のお化けをなんかおもしろい話だになって、他にもあるお話だけど、おもしろいお話だになって思ってたんです。土見さん自身も言ってくださいました。小さい頃に聞いてこの一つはよく覚えてるっておっしゃってたんです。

こうやって、土見さんの島での米作りのお話を聞いているうちに、本屋敷に田んぼも屋敷もあったんですけど、その田んぼのお話を聞いているうちにこのお話が全く違ったことを私に、違う意味をまた、私に教えてくれている気がして、胸が打たれる気持ちになりました。

それでは、ここでこちらのお話は終わりにしたいと思いますけど、みなさんの見ての感想をお願いします。

◆ みなさんと感想や意見の交換

小田嶋一はい。一応これを見ていただく土見さんの語りは全て終わりました。最初に見ていただいた「古下駄のお化け」から、田んぼのこと、陰田島の世間話などを聞いてもらって、質問でもちょっとした感想でもいいので、是非出していただけたことがあればいかがでしょうか？

山田一今日は土見さんのご長男夫婦の方がいらしていますのでご紹介します。すみませんが、どうぞこちらへ。

土見正昭さん—壽郎の長男でございます。今日はありがとうございます。私も知らなかったんですけどね、寒風沢は結構田んぼが多いんですよね。ちょっと待ってください。これが（地図）島ですよ。結構ね島が、こうにやぐにやぐにやぐにやしてるんです。そこに平坦なところがあれば全部田んぼがあるんですよ。今は。もうほとんど作ってなくて、そこにも行けないし、道がないんです。寒風沢の田んぼを所有している人が、寒風沢島の人だけかという、そうでもないんです。他の島の人も、ちゃんと私の田んぼはここにありますがというのがあって、ええ。私も経験したんですけど、この歩いていけないところに田んぼを作って、船で刈り取った稲を船に積んで持って来てっていうことをよくしてました、はい。住んでたところはここなんです。元屋敷っていうのがここにあったんです。でえ実際に家があるところがこれとこの辺で、真ん中の白っぽい処は、もう津波で誰も住んじゃだめよということで。ここに何かこうありますが、これがあの公営住宅。新しく建てた公営住宅なんです。でえ、この辺の白いところ全部堤防なんですよ。ここから先は、全部こう田んぼだったんです。でえもうちょっと小さくしてくださいませんか？でね、この辺にも田んぼ、ここにも田んぼ、ここのこの白いところみんな見えますけど、全部堤防なんですよ。堤防の周りこんな色がちょっとこうぼやけたこういう色をしてるところは全部平坦地で、そこには農地、田んぼがありました。で、今はもう草ぼうぼうなんですけどね。それとね、元屋敷の「元」という字を、「本」という字を書く時もあるんです。なんでかなと思うんですけども、この田んぼとか私相続したんですけども、登記に行ったらそっちの田んぼでした。

津波は、こことこことこことそしてこっから抜けた津波がね、この辺も多分こっちまでこうストンと落ちたと思います。ここの堤防にぶつかって、上に上がった水が、この前の津波の後に行ったときに、ここの堤防のすぐ内側んとこに大きな穴が開いてたんですよ。波が乗り越えてストンと落ちて、堤防を多分吹っ飛ばしたんだと思います。この辺は田んぼ、田んぼ、ここも田んぼ、ここも田んぼですね。これも田んぼですね。こっちはもう平らなところは、入り江になって全部田んぼ。この白い部分は、全部堤防を作ってるんですけども、何か知らないけど堤防は要らなかったかなと。今、誰も（田んぼ）作ってませんから。さっき言った日和山ですね、（写真を示し）ここです。さっき映した寒風沢水道がここになって、さっき言った堤防がここですね。そういった感じで…先程、田んぼの話が出ましたので、ついでに気がついたことを言いました。どうも失礼しました。（拍手）

C—すみません、ちなみに最盛期には田んぼは、何反歩作っていたんですか。

土見正昭さん—はい。田んぼは家は二町歩^{うち}ぐらいですか。塩釜という処は、農家ってのが少ないんですよ。ほとんど田んぼも畑もないんです。家が唯一の専業農家^{うち}だったみたいです、ただ一軒だけ塩釜で、はい。

D—いいですか？この間土見正昭さんと歩いているとき、この左側で浦霞^{うらかすみ}（酒の名）の米を作ってたんだって言ってましたが、今もやってるんですか？

土見正昭さん—ええ今はまあ、やってんのかどうか分かんないです。でも、その場所では確かまだ作っています、

小田嶋—ありがとうございました。その浦霞^{うらかすみ}（酒の名）の話なんですけど、今も限られた方ですけども、その元屋敷の処の田んぼを耕して、ササニシキを作って、それを佐浦酒造に頼んで醸造してもらって、「寒風沢」という清酒を作っております。塩釜でも多分買えるかと思います、はい。ありがとうございました。あと、なにかご意見があれば…はい。

E—たまたまなんですけど、タベですね、NHKのBSで「離島で発見！ラストファミリー」という、ちょっといやらしい番組名なんですけど、これで実は寒風沢が丹念に紹介されていて、今、田んぼを広く作っておられる民宿をやっておられる戸川さんが紹介されていて、そんな中でおっと思う話があったんですね。ここの田んぼの作り方だけはよそとは違うんだと言うことをおっしゃってて、先ほどご説明の中にもあったように、最初水稻を作って水を入れてね。排水が大変なんだっていう話がありましたけども、寒風沢の場合は、刈るときまでずっと水が入っているという話なんですよね。で、それをおっと思つて、それはなぜなんだっていうのがもう一つ判然とはしないみたいなんですけど、海水が入ってきやすいので、その海水を、塩分を薄めるためとかっていう話とか、でえもう一つは、おっきな理由は、実は水のない、川もない、沼もない池なので、田んぼが実は水源なのだと言う説明がされてました。ほうって思ってたんですが、今ずっと話を聞いててふと思ったのは、もしかしてそういうふうになったのは震災の後ではないのかな？という理屈づけとしてはですね、というか、そういう田んぼづくりの文化がそういうふうに変ったのは、そんなに昔のことではないんじゃないかっていう疑念も湧いたんですが。土見さんの息子さんならご存知かなとかって思ってたんですが、そこら辺いかがでしょうか？

鈴木宏明さん—隣の島の野々島っていうところに住んでおります。それで土見壽郎さんとも、生前いろいろと懇意にいただきました。それで、先程の方の御質問なんですけど、浦戸諸島には地下水脈がないんですよ。ですからいくらボーリングしても水が湧いてこないんです。当然この飲み水はみんな自分の家で井戸を掘ってますけど、井戸水の湧きが悪い所っていうのは、自然と水が染み込んでから、少し余計とっちゃうと、なかなか次の日まで回復が難しいんです。ところが私の家は水がどんどん湧くよっていう、そういうふうな人の家のお茶を飲むと、ちょっとしょっぱいんですよね。そういうふうなことですから、田んぼはずっと天水で、とにかく雨が降らないと田植えできないような地域だったわけです。それが昭和三十年代後半になってから、海苔の産業が浦戸全体で盛んになってきたんです。海苔っていうのは皆さんご存知かどうかかわからないけど、ものすごく水の使う仕事なんですよね。それで、その当時国とかなんかに働きかけて、塩釜市から海底を水道管を引っ張って、海苔を作っていたわけなんです。ですから当然、専業農家の土見壽郎さんは、寝ても覚めても雨が降らないかなっていう夢にまで見たっていうのは、まさに私も理解できます。ところが、残念ながらそういうふうにして自分の父親とか、あるいはおじいさんとかが一生懸命、さっき土見さんが説明したこういうふうな入り江にも田んぼがある、こういうふうな入り江にも田んぼがあるって、田んぼを作ったんですけど、今、残念ながら

昭和四十年代に減反政策ができて、米が余る時代が来ましたですね。その時に田んぼを放棄する人がいっぱいいて、結局田んぼを作るよりも、海からの恵みで得たものをお金に変えることの方が効率よくなってしまったわけなんです。何か途中で話ずれましたが、そういうことなんです、ええ。

山田—鈴木宏明さんは隣の野々島に今も暮らしておられます。この野々島は松島湾のカキの発祥の地の島なんだそうです。それで、それを何とかしてもう一回復興したいとこの間までカキづくりをなさっていました。今も、野々島に暮らしておられて、何とか浦戸諸島のために、それから、みんなに島に来てほしいというそういうお気持ちで暮らしておられます。実は去年から、鈴木さんの暮らしや言い伝えなどのお話を記録させていただいております。またそれも、皆さんに見ていただく機会があるといいなと思っています。鈴木さん何か一言ありませんか？島のことについてでもなんでもいいんですが、もう一言どうぞ。

鈴木宏明さん—まあ、私も若い時はちょっとやっぱり人恋しくて外にも出たんですけど、でもよくよく考えてみるとおやじ、おふくろが海の仕事で疲れてるからっていう電話があって、親のことだからこれは絶対だめだよなっていうことで戻ってきて、だんだんだんだん島の良さが、本当に考えてみると、こっつて日本三景のうちの一つなんだっていうことに気がついた時は、もう五十を過ぎていて。今は女房と二人で生活してますけど、ものすごく自然の中で楽しんで生活しております。あと、先程ちょっとこれ蛇足になりますが、寒風沢島に城壁みたいな堤防ができてしまったっていうことを、あの時、島津区長さんはものすごく悩んだらしいんです。ところが野々島の方では、堤防高いの要らないっていうことを、みんなで最後まで反対したんです。今生きてる人の総意で堤防は高くいらない。もし二、三百年後にまたこういうことがあったら、石碑にでも書いてごめんなさいねって大きな石碑でも作っておくからっていうことで、最後の最後まで、高い堤防はいらないっていう反対をしているうちに、何かどんどん宮城県の方でも高い堤防を作るのにトーンダウンしてきたみたいで。結局、島の人達でもやはり寒風沢島は正直言って三名の方が犠牲になったからやっぱり犠牲者を出してしまったっていうことで、島津区長は苦渋の決断を下したものと思っております。良かったら浦戸の方に遊びにいらしてください。（拍手）

小田嶋—ありがとうございます。本当に島って言うとお海のお仕事が一番にイメージされるかと思うんですが、でもその海と関わりながらも、その海の干満の環境とかも利用しながらも、田んぼを作るっていうことに皆さんすごく懸命になってやってこられたっていうのが、土見さんの語りから見えてくるんじゃないかなと思います。あと、その海が見えるっていうことが、海と暮らしてきた人にとって、とても大事なことなんだなっていうのがよく分かるかなと思います。他に何か聞きたいことなり感想なりありましたら、はい。

北村規子（みやぎ民話の会・日本民話の会）—すみません、北村と申します。今日はどうもありがとうございます。すごくつまらない感想なのですが、古下駄の話を聞いて、江戸時代の道具が発達して、それを無駄にしないってそういう話なのかなって最初思っていたんですけど、それが、もとは元屋敷があって、その後の津波っていうことを聞いた時に思い出したのが、気仙沼にあるリアスアーク美術館ですか、そこでは瓦礫を瓦礫と呼ばないで被災物と呼んでいるんですね。もしかしたら、そこにあった古ガッパとか古下駄とかいうのは、単に古くなったから人が捨てたのではなくて、津波でもかし

て打ち上げられたもの、あるいはそこの屋敷を引き払うしかなかった人達がそこに置いていったもの、あるいはそこで何かゴミを回収するまでもなく亡くなってしまった人達のものとか、そういった津波のいろんな歴史の中で、そこに外から見れば打ち捨てられたものかもしれないけども、そこに残ってしまったものなんではないかなと、そんなふうになんと想像しました。その時に、それを焼いて供養するっていうのは、津波で亡くなった方たちとか、そこでいろんな悲しむ人達の想いをこう天に届ける、そんなような意味があったんじゃないかなっていうふうに考えました。（拍手）

小田嶋一 ありがとうございます。この「古下駄のお化け」っていうどこにでもある話が、その土地に根付くっていうことの意味をひとつ、その考え方を示していただいたんじゃないのかなと思います。ありがとうございます。その他に何かありますか？はい。

島津（民話声の図書室）一本当に島で米を作るってことがどんなに大変なことかっていうことを、この土見さんの語りを聞いて、本当に水一つにしてもそうですし、機械も運べないところは手で耕したりと。今、息子さんのお話をお聞きして、私は寒風沢にこないだ行ってきたのですが、広い田んぼがあるんですが、その向こうはどうなっているだろうなと思ったら、そういうところにも田んぼをいっぱい作っていて、そこを船で渡るしかなかったっていうことを知って、そんな苦労までされてこられたということが分かりました。そうした田作りっていうのは、寒風沢一というより塩釜一の米作り農家であったんだと、そんな土見さんは本当にすごい方だなと思いました。震災後に、寒風沢島に行った時にまだ堤防はできてなかったんです。田んぼを復元しようっていうか、元の通りに直そうっていう工事をしているという看板が立っていました。私は、そこに何億円という金額がかかるんだろう、土見寿郎さんはもう土地を離れてらっしゃるのに、誰がこの田んぼを作るんだろう、息子さんが戻ってこられるんだろうかなんて思ったんですが、そんなはずはないなと思っていたんです。—結局、NPOの法人というか若い人達が作るらしいよって聞いていたんです。それも定かじゃなかったんで、今回行ってみると、本当に荒れたまんまで、葦とか葦とかそういうものがいっぱい生い茂ってて、本当に片隅にだけ田んぼがあるっていう状態になっていました。土見さんが何度も何度も「城壁」っていう言葉を使ってらっしゃいましたよね。なんかすごく心に刺さるんです。そして、その城壁やその田んぼの復元の仕方について、その土地で暮らした人ではない人達が計画を立て、工事をするのも他所からやってきた人だろうと思うと、そういうふうにして政策がなされていくのが、なんか悲しく思われます。そういう意味で、この「古下駄のお化け」のお話は、焼き供養と言われているんですが、何を供養しているのか、そこまで思いを持って取り組んでくれているのかなあと感じました。だから、そういう意味では、こうやってお元気でいられた土見寿郎さんのDVDのお話を聞いていただけるのも、このように記録に残してもらったからだ、大変良かったなあと感じています。ありがとうございます。（拍手）

小田嶋一 はい、ありがとうございます。あつ、はい。

F—土見さんの城壁、城壁っていうその言葉の中に込められた想いが、いろんな方面から感じるものをその言葉で表して感じてもらいたいっていう気持ちも随分あったんだろうなって思ったんです。それで、私の故郷のある気仙郡というところも、昔は明治の津波の時なんかは、今のような情報が発達しているわけじゃない時代なのでね、根先という岬から青松島と椿島が海の方の門のように並んで洋上に見えるんだけど、地震の後にそこを見ていたら海の水が全然無くなったんですって。それで、その地域の

人が、「海の水無くなったあ」って大騒ぎしたって。そうしているうちに、間もなく大きな津波が押し寄せてきたっていうね、そういう世間話を書いてあるものもあったりするのですが、その時代は仕方がなかったけれども、今は本当に何かテレビでもラジオでもそれからスマホでも何でもいろんなところから情報が届く時代になったから、本当に命を守るために逃げるっていうことがどんなに大事かっていうことをいうことと一緒に、施設を作って海の廻りをめぐらしてしまうっていうのが本当にいいのかどうかっていう、そんないろんな複雑な思いを持ちながらこうやって暮らしてこられたんだろうなって、何ともうまく表現できないですけども、土見さんの心の中にいろんな思いがこもっていて表した言葉が城壁かなあって思いながら聞きました。こんなもんで、なんか手を挙げるほどのことじゃないのだけでもね。（拍手）

小田嶋—いいえ。はい、どうぞ。

G—塩釜から参りました。土見さんに久々に会えて、本当にあの通りの方なんです。災害公営住宅に住んでいたんですけども、そこでずっと関わっておりました。そこでサロンやっていたんですけども本当にね、「土見さん、今日もひとつどうですか」と言うと、すぐに出てくるんですよいろんな民話が。本当にあのままの方なんです。私たちは、災害公営住宅でサロンやっているんですが、ある地区で「土見さんの民話を聞く会」を開いたんですね。いっぱい来てくれて、すごく好評だったんですよ。で、もう一回やりたいなと思ってる場所だったのがね、ちょうど土見さん、去年の十一月二十日に亡くなったんです。それで、十一月五日が九十九歳の誕生日だったんですよ。で、それが十一月二十日に亡くなって、本当に満九十九歳で亡くなったんですね。

寒風沢の田んぼの話なんですけども、土見さんはね、鍬を使わなかったって言うんですよ。手を見るとがっちりした手をしてますよね。全部スコップでやったって言ったんですね。土見さんは、鍬を使わないでスコップでやったっていう話をずっと聞いてました。今、その田んぼがどうなってるかなんですけども、実は土見さんの田んぼを引き継いでやってる方がいらっしゃるんですよ。それが先程ちょっと出た外川さんという民宿をやっている処の家で、そこに行くと土見さんの家の田んぼのお米が食べられます。もし良かったら予約して行っていただければいいと思います。実は私、災害被災者支援事業をやって十四年になるんですけども、ずうっと土見さんに関わっておりました。浦戸にも行きますし、それこそ野々島にもね。来月三月六日の日にね、寒風沢に行くんです。今日のお話を是非寒風沢の方にお伝えしたいと思ってます。やっぱり聞かれるんですよ、「土見さんどうしてる」って。「ちょっと今入院しちゃったよ」とかそういう話をしたりしてね。今日は、土見さんの話を皆さんにいっぱい聞いてもらったっていうことをぜひ報告したいと思っております。かえって今日は、どうもありがとうございました。あと、寒風沢の民宿「戸川屋」さんで土見さんの処のお米を食べていただければいいかなと思います。はい、すいません。

長須賀直子（みやぎ民話の会）—私も山田さん達と一緒に随分土見さんのお宅に伺って、いっぱいお話を聞きました。今日映像を見てて、本当に懐かしく涙が出る思いになったんですけど、土見さんが語ってこられたのは、やっぱり鍬頭として一生懸命田んぼをやって、兵隊にも取られて苦労して帰ってこられて、もういろんなお話を全部聞いたんですね。本当にもう頑張って生きてこられたなっていう思いがしてまして、海がやっぱりどれほどね、良かったかっていうことで、やっぱり海と田んぼが堤さんにとってはとても大事なものだっただけですけども、これ、たまたまちょっとテレビで昨日見たんですけど、

人が恋愛した時に海に行くっていう話ありましたね。それは、海に行くとなんか気持ちがおさまるっていうことらしいのです。お母さんのお腹にいた時に、やっぱりお母さんのお腹の中でこう聞く音、それが海の音と同じだっていうの。たまたま昨日そういうテレビでやっていましたね。海がどれほど人間にとって大事なもののなのか、海のものを色々恵んでくれるだけではなく、人間にとって海はなくてはならないものなんだから、そういう城壁でね、本当にこう見えなくなるっていうのはどれほど大変なことなのかなっていうことを昨日たまたま思ったものでした。本当に一生懸命に生きてこられた土見さんだったので、今日は本当に皆さんに聞いていただいて良かったかなって思いました。何か変な感想で。（拍手）

山田—いつも長須賀さんと一緒に通いました。もうそろそろ時間ですけども、最後に土見さんのことを一言だけお話ししたいと思うのです。土見さんがある時、本当に田んぼの仕事は大変だったと。それで自分は、五十歳ぐらいまで生きてこられるかなと思う時があったっておっしゃるんですね。それから土見さんは、戦争にも行かれたんですよ。大正十四年で生まれで昭和十九年の年、終戦の一年前の夏にですね十九歳で。ほんとうは二十歳で召集されるのですが、十九歳の年に自分は召集になって行ったって言うんですね。中国に行ったって言うんですが、終戦の後になっても八路軍と戦うってことになってしまって、すぐには帰ってこれなかったそうです。もう食べるものもないし、着る物もないし、それこそ戦争が終わったといっても、もう多分自分は助からないかなと思ったとおっしゃるんですね。行く前には六十五キロぐらいあった体重が、帰った時には四十八キロだったそうです。本当に骨と皮ばかりになって帰ってきたと。でも、こんなに九十過ぎまで、もう駄目かなと思う時もあったけど、自分はこうやって生きてきたっていうふうにおっしゃったんです。今日は土見さんの映像を見ていただきましたけど、土見さんはいつでもお話が悲嘆にくれるってことがありますでした。最後にお会いした時も、自分の今楽しみにしてること、これからやってみたいことをこういう顔でこういう凜とした姿勢でお話しされていました。きっと土見さんも、皆さんがこうやって一生懸命お話を聞いてくださったこと、それからご長男の方とか鈴木さん、それから土見さんと縁のあった方々が来て、お話を一生懸命聞いてくださったことを、きっとここで聞いていただいていると思うし、喜んでくださっていると思います。今日は県外からもいらっしゃっています。本当にたくさんの方に参加いただいて、見ていただいてありがとうございました。（拍手）

小田嶋—みなさん、どうもありがとうございました。土見さんっていう素晴らしい方とその暮らしとそのお話が一体となっているっていうことを感じられた語りじゃなかったかなと思います。で、一応これで終わらせていただくんですが、最後にですね、土見さんが、「塩竈甚句」を歌っていらっしゃいますので、それを聞きながらというか、見ながら終わりにしたいなと思います。ありがとうございました。

♪ ♪ ♪ ♪ 土見さんが歌う「塩釜甚句」が会場に流れる ♪ ♪ ♪ ♪

山田—どうぞ聴きながらお帰りください。実は土見さんは、東北放送の大会賞を頂く程の民謡の歌い手だったんです。ありがとうございます。